

■小早川秀秋 関ヶ原の戦で、東軍に寝返り家康勝利の契機をつくった裏切者とされてきたが、頭が良く心優しい武将だった。

こばやかわひであき

本能寺の変・1582＝

織田信長が明智光秀に殺されるという大事件の起き、羽柴秀吉が天下統一に名乗りを上げた年、近江国長浜で、羽柴秀吉の正室高台院(北政所)の兄木下家定の五男に生まれる。母は杉原家次の娘。幼名は辰之助。

豊臣秀吉関白1585＝ 3歳：

羽柴秀吉の後継者として養子にされ、羽柴秀俊を名乗って、高台院(北政所)に育てられ、

秀吉太政大臣1586＝ 4歳：

秀吉が正親町天皇から豊臣姓を賜ったのに従い、豊臣秀俊になる。

関白近衛信伊が、秀秋没後に書いた追悼文には、'太閤(秀吉)がとくに愛しみ、早くから学問や手習いをして、物心のついた頃には、道義を弁え、貧しい武士や不遇の人々を救いたいと願うようになった'とあり、

刀狩海賊取締1588＝ 6歳：

後陽成天皇の聚楽第行幸では、内大臣織田信雄以下6大名が連署した起請文の宛所が金吾殿(秀俊)とされ、秀吉の代理で天皇への誓いを受け取り、秀吉に臣下の礼をとるために上洛した毛利輝元は、聚楽第で、秀吉の部将らとともに謁見したが、秀吉の退場後、その席に秀俊が座したと書き残しているほどで、

..... 1589＝ 7歳：

秀吉の後継者候補として元服し、豊臣秀勝の領地であった丹波国龜山城10万石を与えられ、

秀吉全国統一1590＝ 8歳：

士農工商公布1591＝ 9歳：

豊臣姓が確認され、従三位権中納言兼左衛門督に叙任し、"丹波中納言"と呼ばれ、諸大名からは関白豊臣秀次に次ぐ、豊臣家の継承権保持者ともみられていたが、

方広寺大仏殿1593＝11歳：

*秀吉に実子拾(秀頼)が生まれたことで立場は一変、秀吉幕下の黒田孝高から、毛利家を完全に味方につけるべく、元就の後継者の一人小早川隆景に、'秀俊を毛利輝元の養子に貰い受けてはどうか'との話が持ちかけられ、秀吉に潰されることを恐れていた隆景は、小早川家の養子に貰い受けたいと申し出て認められ、秀吉の命により、隆景と養子縁組、これを機に、隆景の官位は中納言にまで上昇し、小早川家の家格も上昇することになる。まさに、大人たちの思惑に翻弄されるのである。

関白秀次事件1595＝13歳：

秀次事件に連座して羽柴家の一門として領していた丹波亀山領10万石を改易されると、隆景が主な家臣を連れて備後国三原へ隠居し、小早川領を相続する形で、九州に下り筑前国(名島城)国主、33万石の大名になるとともに、輝元の養女を正室に迎えて、正式に毛利一門に名を連ねるが、この際、輝元は養女に対し、'秀秋は非常に利口な人物だから、扱いは丁重にせよ'と申し渡しているほど、評価は高い。

慶長の役・・ 1597＝15歳：

秀吉の命で、朝鮮半島へ渡海、初陣ながら、総大将として、前線からの注進を取り次ぐ任が与えられ、陣中に養父隆景が没して、秀秋へ改名、朝鮮軍に囲まれるも、'何の成果も挙げていない'と、敵陣に自ら乗り込んで初陣を飾る一方、秀頼を側面から支えて欲しいと願う秀吉からの再三の帰国要請を受けて、

豊臣秀吉没・ 1598＝16歳：

ようやく帰国すると、秀吉より越前国29万石への減封転封命令が下った。これにより筑前国の旧小早川領は太閤蔵入地となり、はじめ石田三成が単独で、のちに浅野長政も代官になっている。大幅な減封により、多くの家臣を解雇することになったが、その秀吉が死去すると、その遺命をもとに、

前田利家没・ 1599＝17歳：

徳川家康ら五大老連署の知行宛行状が発行され、筑前・筑後に復領、所領高も59万石と大幅に増加した。この時、博多の町衆の意向を受けて、山口宗永によって否定されていた博多への"守護不入"復活を約束するなど、心優しい面も見せるとともに、小早川家とも羽柴家とも異なる独自の家紋"違鎌文"を用い、両家から抜け出そうとした矢先、秀吉の遺臣石田三成と徳川家康の対立が激化、

関ヶ原の戦・ 1600＝18歳：

家康が、三成と懇意な会津の上杉勝討伐のため、屁理屈をつけて、全国の大名に出陣を命じた際、筑前から東上するも、秀頼を守護すべく大坂に止まるが、家康が留守の間に、毛利輝元が、三成に従って大坂城を乗っ取って、家康に叛旗を翻し、小早川家もそれに従わざるを得なくなり、*いわゆる"関ヶ原の戦"が始まると、西軍総大将輝元のもと、東軍鳥居元忠が守る伏見城攻撃に参戦する一方、家老の稲葉正成・平岡頼勝とその頼勝の親戚である東軍の黒田長政を介して、密かに東軍と接触、本戦開戦直前の、長政と浅野幸長の連名による書状には、'我々は北政所(高台院)様のために動いており、ご奉公のためにも、家康公のために働くよう決断された'とあり、おそらく、この段階で、家康へ味方することを決断し、家康は本戦開戦に踏み切ったと見られる。伏見城の戦以降の行方は良く分かっていないが、一人戦線を離れるべく、近江や伊勢で鷹狩りなどをしていたようで、突如として、1万5,000の軍勢を率い、伊藤盛正を追い出して、関ヶ原の戦場を一望できる松尾山城に入城、その突出した場所に陣を構え、いつでも東軍として出陣できるよう周辺整備。始まった本戦で、西軍有利に戦況が進展しながらも膠着する戦を傍観、たびたび使者を送ったにもかかわらず傍観し続ける秀秋に、家康は'あの小倅め見誤ったのか'と苛立つが、おそらく、あたかも西軍の一員として戦う体制を整えているように見せていたものであり、決戦当日、ついに松尾山を下って、西軍の大谷吉継の陣へ攻めかかった。この際、小早川勢で一手の大将を務めていた松野重元は主君の離反に納得出来なかったため、無断で撤退しているほどである。大谷勢は寡兵ながらもよく戦って小早川勢を食い止めたが、西軍は秀秋と家康に挟まれる状態になっただけでなく、輝元が密かに、家康と和議を結んでいたため、西軍の諸將は討死して壊滅、三成は大坂城を目指し伊吹山中へ逃亡した。戦後の論功行賞では、備前国・美作国・備中国東半にまたがる旧宇喜多秀家領の岡山55万石に加増・移封され、秀秋から秀詮へと改名。秀詮はこの国替えの際に前領地の筑前国より年貢を持ち去っている。

朱印船制始・ 1601＝19歳：

家老を長年勤めた重臣稲葉正成が小早川家を出奔しているが、この背景には旧来の家臣団層と、新たに台頭してきた側近層との対立が背景にあると考えられる。領国を訪れて岡山城に入り、家臣の知行割り当て、寺社寄進領の安堵といった施策を行う一方で、伊岐遠江守・林長吉ら側近勢力の拡充を図るが、

東本願寺創建1602＝20歳：

聖護院道澄の残した記録によると、上方から帰国の途上で行った鷹狩の最中に体調を崩し、その3日後に、没した。秀秋を幼時から育ててきた北政所は、若くして没した秀秋を供養すべく、在りし日の秀秋を思い出しながら肖像画を描かせている。

秀詮には子がいなかったため、小早川家は断絶、領国は家康に接収され、徳川政権初めの無嗣改易になった。秀詮の旧臣たちは関ヶ原での裏切りを責められたため仕官先がなかったなどといわれることがあるが、実際には最後まで秀詮に仕えた後に幕府に召し出され、大名となって立藩した平岡頼勝がいるほか、前田家や紀伊徳川家の家臣となった者もいた。秀詮のこの早世について、同じ月に兄弟三人も病死したとして、秀秋の裏切りによって討ち死した大谷吉継の祟りによるものとされてきたが、実際に残されている病歴から、酒色(アルコール依存症)による内臓疾患が死因として最有力となっている。曲直瀬玄朔が記した「医学天正記」には、この年、酒疸による黄疸の症状が激しくなり治療をしたことが記されている。"黄疸"の項目には、大量の飲酒による黄疸、みぞおちあたりのしこり、飲食ができず喉が渇く云々とある。"黄疸"のほか、"内傷付飲食(飲食の不摂生による内臓の疾患)"、"消渴(糖尿病)"の項目に名前が上がり、食欲不振、酒を飲むと吐く、舌が黒く尿が赤いなどと書かれている。巨大なストレスから逃れるべく、酒浸りになったのではないだろうか。小早川家が断絶した上、伏見城で三河以来家康の側近鳥居元忠を殺したことなどで、徳川政権が、秀秋の功績を隠してしまったため、江戸時代が進むに従い、"関ヶ原の闘い"で西軍方を裏切った行為に付いて、豊臣家の養子として出世したにもかかわらずに裏切り、西軍を瓦解させた事は卑怯な行為、"武士の恥"であると、世間の嘲笑を受けるようになるのである。